

令和 4 年度 【 学園研究費助成金 < B > 】 研究成果報告書

学部名 生活科学部

フリガナ カワグチ キョウコ
氏 名 川口 香子

研究期間 令和 4 年度

研究課題名 サードプレイスとなるコミュニティ拠点の使われ方に関する研究

研究組織

	氏 名	学 部	職 位
研究代表者	川口 香子	生活科学部	助教

1. 本研究開始の背景や目的等 (200 字～300 字程度で記述)

少子高齢化に伴う核家族化や独居高齢者の増加などを背景に、地域のコミュニティが希薄化し、社会的孤立が問題となっている。その対策の一つとして、地域における居場所づくりが行政や当事者を主導として進められてきた。昨年実施した名古屋市の 5 つの学区を対象として居場所に関する調査では、行政主体または民間のコミュニティ機能を有した施設を居場所（サードプレイス）と考える人が一定数存在することが把握できた。そこで本研究では、まちの居場所（サードプレイス）として機能するコミュニティ拠点に着目し、日常的な使われ方、運営主体が誰なのかといったコミュニティ拠点の在り方を明らかにする。

2. 研究の推進方策 (300 字程度で記述)

本研究の目的は、コミュニティ拠点の日常的な使われ方、運営主体が誰なのかといったコミュニティ拠点の在り方を明らかにすることである。具体的には以下の調査分析を行う。

調査①：コミュニティ拠点の成り立ち、役割を明らかにする。 既往研究、コミュニティ拠点の運営者へのインタビュー、利用者の実態調査を実施する。

調査②：公園や学童など既存の人が集まる空間について、利用者属性や利用目的を明らかにし、人が集まる要因を明らかにする。

3. 研究成果の概要 (600字～800字程度で記述)

本研究ではまず、コミュニティ拠点の成り立ちや役割を明らかにするため、既往研究およびコミュニティ拠点の運営者に対してインタビュー調査を行った。その中で従来の公共主体のコミュニティ形成ではなく、民間主導もしくは民間と公的機関が連携して既存のストックなどの施設を再生し運営するような、「新しい公共性」にもとづいた「場（または拠点）」の再生や活性化などの取り組みが、各地で行われるようになってきていることが明らかとなった。これらの拠点は従来の箱を計画してから場づくりや、箱ができてから運営を委託するようなやり方ではなく、再生や利用・運営に利害関係者（事業社、住民や利用者、行政を含む）が形成プロセスから関わることで、より社会情勢や利用の実態に沿うような施設づくりがされている。本研究ではこれらの民間主導の拠点を「運営者」と「施設の所有者」を軸に分類をして整理を行った。

また、従来のコミュニティ拠点にも目を向け、緑区を対象に公園の利用実態調査を実施した。緑区内の10箇所の公園を抽出し、平日の午前・午後の2回の利用人数・利用目的と公園の入り口、遊具の数や立地条件を整理し、利用者の多い公園の要因を明らかにした。結果としては近隣に商業施設があるなど、公園内の要素に限らず外部条件が影響していることが明らかとなった。また、立地条件によって子どもが多く集まる公園と、高齢者や成人が集まる公園が異なることも明らかとなった。

4. キーワード (本研究のキーワードを1項目以上8項目以内で記載)

①コミュニティ	②コミュニティ拠点	③	④
⑤	⑥	⑦	⑧

5. 研究成果及び今後の展望 (公開した研究成果、今後の研究成果公開予定・方法等について記載すること。既に公開したものについては次の通り記載すること。著書は、著者名、書名、頁数、発行年月日、出版社名を記載。論文は、著書名、題名、掲載誌名、発行年、巻・号・頁を記載。学会発表は発表者名、発表標題、学会名、発表年月日を記載。著者名、発表者名が多い場合には主な者を記載し、他〇名等で省略可。発表数が多い場合には代表的なもののみ数件を記載。)

本年度は、公共主体のコミュニティ拠点を明らかにすることに止まったため、今後は具体的な利用者の利用目的や形成に至る経緯などを明らかにしていくことが必要であると考えている。今年度まとめた成果をもとに、科学研究費取得を目指す予定である。